

# 川端康成と少女小説

——『小公女』の翻訳からみる川端の目指した少女小説——

佐藤真衣

はじめに

川端康成は一八九九（明治三十二）年に、大阪で生まれた作家・批評家である。代表作に日本の美しさを描いた傑作『雪国』があり、昭和四十二年に日本人として初のノーベル文学賞を受賞している。

一九七二（昭和四十七）年、逗子の仕事部屋で自ら命を絶った。『雪国』やノーベル文学賞で有名な川端康成は、文壇作家としては珍しく数多くの少女小説を残している。川端が少女雑誌に掲載した作品は全部で五十作品。内、少女小説として書かれた作品は二十三作品である。本論文では、この二十三作品に着目し、川端の描いた少女小説の傾向を探ることとする。

しかし、これら多くの川端作品には代作の可能性がある。そのため百パーセント川端の書いたものと言うことが出来ない。それでも、『乙女の港』『花日記』の代作者・中里恒子と川端の往復書簡から、代作はゴーストライターという役割よりは、師弟関係に近いとすることができた。強い信頼関係の上での代作は、単なる名前貸しとは異なり、これらの代作と言われている作品の中にも、川端の少女小

説に対する想いが詰まっているとすることが出来るだろう。

本論では『小公女』の翻訳に着目し、伊藤整との翻訳比較を通して川端の描き出そうとした「少女像」を究明していく。川端は一九五三（昭和二十八）年六月、野上彰との共訳で『小公女』を発表している。

本論の一章では川端の少女小説の傾向を探り、二章で「小公女」を中心として川端の描く「少女像」に着目し、三章において中里恒子との関係から川端の代作についてその真相をみると共に、川端が少女小説界に伝えようとしたメッセージを本論で探っていくことにする。

## 一 川端康成の少女小説

川端康成の少女雑誌掲載の少女小説作品数が二十三作品ということとは先述した通りであるが、その内訳を詳しく見ていくと「少女倶楽部」「少女の友」への掲載が突出して多い。「少女倶楽部」に掲載された小説は九作品、「少女の友」には七作品とやや「少女倶楽部」

が多いものの、ほぼ同数の作品数である。

「少女倶楽部」と「少女の友」は昭和期の二大少女雑誌として少女達から多く読まれていた雑誌である。大正期には「少女世界」(博文館)、「少女画報」(東京社)、「少女の友」(実業之日本社)の人氣が高かつたものの、昭和に入り女学生の数が次第に増加していくに伴い「少女倶楽部」(大日本雄弁会講談社)の勢いが増した。『日本出版史料第九号』(日本エディタースクール、二〇〇四年五月)では、明治・大正期に数多く創刊された少女雑誌は昭和六年の満州事変以降、軍当局の監視下におかれ、内容が軍国化していくと共に雑誌の統合改竄が進められたため、東京社の「少女画報」が昭和十七年三月に「少女の友」と合併され、残った雑誌が「少女倶楽部」と「少女の友」の二誌となったと書かれている。

なぜこの二誌が残されたのかについて考察する。「少女倶楽部」は大正十二年に「おもしろくてためになる」編集意図のもと創刊された少女雑誌で、長編小説や現実の生活性を含んだ小説が多いのが特徴である。『日本出版史料第九号』から「少女倶楽部」一九二九年一月号「編輯局から」に掲載された文章を引用する。

少女雑誌はたくさんありますが少女倶楽部ほど、面白くて、リツパの雑誌はゼツタイにあります。そして一冊読んだだけで、ドレほど為めになるか知れません。(中略)一冊でそんなに為めになるのですから、つづけて読んであたら女学校卒業と同じくらゐの実力がつくといはれてゐます。学校へ行つてゐる人はキツト優等生になれます。(中略)一ヶ月僅か五十銭で、一生役に立つ智識が色々憶えられるのだから、これほどトクのことは

ありません。

この言葉からもわかるように「少女倶楽部」は女学校教育に匹敵する知識をつけることができるかと謳っている。

一方、「少女の友」は明治四十一年創刊の四十八年という非常に長い歴史を持つ少女雑誌である。「少女雑誌らしい」雑誌を編集方針にし、竹久夢二や中原淳一などスター画家を生み出した。雑誌の方針からわかるように、「少女倶楽部」と「少女の友」ではターゲットがそれぞれ異なる。「少女倶楽部」が小学校高学年から女学校低学年向けなのに対して「少女の友」は女学校高学年以上の年上を対象とした都会派の雑誌であった。このように両極端な二誌だからこそ、雑誌が絞り込まれた昭和期にも残ることができたのだろう。

「教育性」を重視した「少女倶楽部」と、「娯楽性」を重視した「少女の友」。昭和の二大雑誌と言われていたこの有力二誌に川端は期間を変えて作品を掲載していたのであるが、これには川端の担当者に恵まれなかったという不遇な背景があった。中嶋展子氏は、『学校の花』まで書ききった頃、担当者の不在にあった事を知ることができるとも考えられる。と述べ、『川端康成選集』第五巻(一九二四年十月、改造社)に掲載された川端の「あとがき」を引用している。『学校の花』の出来た頃、私の掛りの「少女倶楽部」記者藤本一二三氏は出征中、藤本氏に次いで私掛りの斉藤喬孝氏は病没した。」と川端が述べているように、「少女倶楽部」への掲載がなくなつたのは川端の意思とは関係なく、ただ単に担当者がいなくなつてしまつたためであると考えられる。その後「少女の友」へと活躍の場を変

えた川端であるが、この経緯は明らかではない。

川端の少女小説作品を通読している中で、雑誌の傾向に合わせ、小説の傾向も異なっている、という一つの特徴に気付くことができた。その特徴は、先述した雑誌の傾向の違いからくるものであると言えらる。そこで、「少女倶楽部」掲載作品は「教育性」、「少女の友」掲載作品は「娯楽性」に傾いている、という仮説のもと作品を探っていく。

「少女倶楽部」掲載作品は『愛犬エリ』『開校記念日』『夏の宿題』『学校の花』『蕃薇の家』『駒鳥温泉』『弟の愛犬』『翼にのせて』『コスモスの友』『学校の花』を除く全ての作品は、小学生が主人公であったり、小学校が舞台であったりする。「教育性」という雑誌の方針がどのようにあらわれているか検討する。「少女倶楽部」には「教科書」の内容がふんだんに盛り込まれている。これは、中嶋展子氏の論文に詳しい。そこで今回本文では主人公の性格に注目していく。

「少女倶楽部」が「教育性」を重視するのであるなら、登場人物、特に主人公は「模範的」な生徒である必要がある。

『愛犬エリ』の主人公は綾子という女の子である。父の土産話の「盲導犬」に感動し、先生から譲り受けた犬を大事にする素直でやさしい子であり、同じく「犬」を題材にとった作品『弟の愛犬』の主人公光子もおなじく動物を大切にすやさしい性格の持ち主である。

学校の中での友情を題材にした作品、『開校記念日』『学校の花』『コスモスの友』の主人公の性格は、人間らしい疑う心を持ちながらも、かわいそうな子のために働くことのできる慈善の心をもった

やさしい子ばかりである。

それから、特に親しい二人の間柄の友情を題材にした作品、『夏の宿題』『駒鳥温泉』『翼にのせて』『コスモスの友』は友人を思いやるやさしい心をもった主人公ばかりであった。

『蕃薇の家』は益田先生という大人が主人公のため、今回は省略するが、このように、作品の題材は異なるが、主人公の少女達はみんなやさしさをもった素直な少女であると言える。まさに、教育的・道徳的な物語の主人公と言えるだろう。

小学生が主人公の「少女倶楽部」に対して、「少女の友」の掲載作品は『乙女の港』『夏の友情』『英習字帖』『花日記』『試験の時』『兄の遺曲』『美しい旅』と、全て女学生が主人公である。この特徴はやはり雑誌の傾向の違いと言えるだろう。

「娯楽性」を重視した誌面作りをした「少女の友」には、やはり女学生たちが好む作品が掲載された。今度は作品のテーマをみていくことにする。『乙女の港』や『夏の友情』『花日記』にあらわれているのは「エス」という女学生独特の関係性である。エスとは、Sister（英語）の頭文字をとったもので、上級生と下級生が親しい間柄になることである。庇護者である『お姉さま』と守られる側の『妹』で、一対一の関係が基本であった。大正・昭和の女学生の間で生まれた制度であり物語中の架空の制度ではなく実際に女学生の間で流行していた。また、作品に大きく関わっている訳ではないが、盲・聾をテーマにした最後の掲載作品『美しい旅』にも主人公の明子の元・お姉さまが聾学校の教師となつて「めぐらでつんぼ」の花子の手助けをする。「お姉さま」が関わってくる話である。

このように「少女の友」ではエンターテイメント性に富んだ作品

が多いことがわかる。読者の対象となつている女学生が読んで楽しめるように書かれている。

以上からまとめると、川端は雑誌の傾向に合わせて作品を書きかえているということがわかるだろう。

他にも川端は「少女世界」「若草」「令女界」に作品を出していたが、これらも雑誌の特徴に合わせた作品になつてゐる。「少女世界」には『薔薇の幽霊』が掲載された。この作品は昭和二年十月に掲載された川端初の少女雑誌掲載作品である。そして昭和九年二月に「少女倶楽部」で『薔薇の家』とタイトルを改め、登場人物名や内容を若干変えて改作がなされた。雑誌「少女世界」は明治三十九年に創刊された少女向け児童雑誌である。児童雑誌に分類されることからわかるように、対象は小学生である。この『薔薇の幽霊』と『薔薇の家』は、小学校の先生が「薔薇の家」と呼ばれる家に住むことになり、そこで起こる不思議な出来事を描いた作品である。少女世界の『薔薇の幽霊』がその不思議な出来事の正体が以前その家に住んでいた少女の幽霊であつたのに対し、『薔薇の家』はその亡くなった少女を今でも大切に思う芳子が正体であつた。お伽噺のような『薔薇の幽霊』を「少女倶楽部」では少し現実味をおびた作品として書きかえられた。「少女世界」は『日本近代文学大事典』で「児童雑誌」と分類されていることから、「少女倶楽部」より幼年向けの雑誌であつたと推測できる。そのため、「少女世界」ではお伽噺じみた作品だつたと考えられる。

「令女界」は女学校高学年（二十歳前後の未婚女性向け）の少女と婦人の中間雑誌である。また「若草」は創刊当初「令女界」の姉妹誌として作られているため、「令女界」同様に若干大人向けの雑誌で

あると言える。そのため、「令女界」と「若草」に掲載された作品には「男女の恋愛」が題材となつたものがある。「令女界」に掲載された『花東の時間』『ポオランドの踊子』『翼の抒情歌』がそれにあつた。「少女倶楽部」や「少女の友」には男女の恋愛はテーマにされたことが一度もないため、大きな特徴と言える。

「若草」には作品が全部で二十六作品あつた。しかし、当時「令女界」の姉妹誌として創刊されたにも関わらず、創刊翌年から文芸雑誌として分類されたため、「少女雑誌」と分類するのはばかられたが、少女が登場する作品が多かつたため、「少女小説」と言える作品があると考え、「若草」のみ作品を通読し、分類作業を行った。分類する際には「読者が少女として想定されている」ことを重視して、「登場人物が少女・女性で構成されていること」と「語り手（もしくは主人公）が少女であること」をポイントとし、二十六作品の内二作品を残すことにした。その二作品は『ナアシツサス』と『女生』である。「若草」掲載作品は全体的に暗い印象のものが多く、主人公の性格も大人しかったり、陰気だつたりと明るい雰囲気をした「少女倶楽部」「少女の友」掲載作品とは毛色が異なつてゐた。

川端が雑誌ごとに作品の印象を変えていたということは、担当者の不在でその雑誌に掲載をしなくなつたことからわかるように、雑誌の編集者に合わせて執筆していたということがわかるだろう。また、同じ時期に違う雑誌に掲載することはほとんどなかつたため、掲載雑誌を手掛かりに川端康成の少女小説を書いてきた活動時期をこのように三つに分けた。

#### I 期 始動時代（一九二七／昭二〜一九三二／昭六）

Ⅱ期 「少女倶楽部」時代(一九三二/昭七〜一九三六/昭十一)  
Ⅲ期 「少女の友」時代(一九三七/昭十二〜一九四一/昭十六)

初期のみ「少女世界」「若草」「令女界」と雑誌が混在していたものの、中期、後期に入ると「少女倶楽部」「少女の友」と雑誌が固定され、作品の傾向も先述した通り固定されてきたと言ふことができる。

## 二 『小公女』比較

川端がどのように『小公女』を翻訳していたか、同時期に翻訳を行っていた伊藤整の『小公女』との比較により検証する。また川端が描き出そうとした「少女」像を探るため、セーラ像に着目していく。なお、比較にあたりテキストは角川文庫版(川端康成・野上彰共訳)と新潮文庫版(伊藤整訳)を用いた。

川端訳では「かわいい」というキーワードが多い。「かわいい」というキーワードをその性質から分別すると、

- ① *little* が原文で用いられている箇所を「かわいい」としている
- ② 原文に「かわいい」という表記はないが、川端が付け加えているこの二つに分けることができる。特に、セーラに関する部分について原文を示す。

川端訳 「そういうときのおまえは、とてもかわいくて、おもしろいからなんだよ」

“Because you are such fun when you say them.” (直訳「あなたがそれらを話すときはとても面白いから」)

*little* などの単語がなく、「とてもかわいくて」にあたる原文が見当たらないため②になる。

川端訳 「あなたが、わたしのかわいい子どもになって、ふたりで遊びましょうね。」

“We will play that you are my little girl.” (あなたが私の小さな女の子で私たちは遊びましょう。)

この部分はほぼ原文通りに訳している。*little* を「かわいい」としているのが①にあたる。しかし、伊藤はこれをお母さま(ママ)を遊ぶようにしましょうね。」と意識している。

川端訳 「このへやは、こんなに、かわいらしくて、どんなものよりも高いところにあるのよ。」

“It is so little and so high above everything.” (これはとても小さく、そして全てのものより上の高いのです。)

この文は伊藤訳では、「小さいけれども、この室がいちばん皆の上にあるのよ」となっている。「かわいい」とするか「小さい」とするかで文章のニュアンスが異なっている。川端訳では *little* もプラス要素に感じられるが、伊藤訳ではマイナス要素に感じられるため、川端のセーラの方が前向きな少女に感じられる。

川端訳 「セーラの落ちついたかわいい顔」

Sara's composed little countenance (セーラの落ち着いた小さな顔(き))

川端訳 「明るいかしこそうなかわいい顔」

the sight of her bright, eager little face (あかるく、熱心な小さな顔)

川端訳 「かわいい笑い声」

the little laugh (その小さな笑い)

「これらは全て little を「かわいい」と訳している。しかし、次の文は little ではなく small dark を「かわいい」としている。

川端訳「かわいい顔」

her small dark face (彼女の小さな暗い顔)

川端訳「お天氣の悪い日など、お腹をすかしたみなし子たちがやってきましたら、暖かいパンをやってほしいとかわいらしくたのんだ」

made her little proposal concerning the dreadful days and hungry waits and the buns. (ひどい日とお腹のすいた浮浪児とパンに関してちょっとした企画を作った。)

この文は「little」はあるものの、原文をみると「かわいくたのんだ」とは直訳では導き出しにくい。そのため、川端の意訳になると言える。

このようにセーラに関する部分で「かわいい」という言葉が多くなるのは、川端がセーラを「かわいい」存在として立たせたかったからだろう。

次にセーラの言葉づかいに注目して比較する。

川端訳では外来語の使用が多い。六章の誕生日会の前のシーンを引用し比較する。

(川端訳)

おたんじょう日は、みんなでにぎやかにおこなわれることになつていた。教室は飾りつけられ、パーティー(集まり)がある

はずだった。プレゼントのいろいろな箱をあげるときは、おおはしやぎし、ミンチン先生のおへやでは、すてきなちそうがだされることになつていた。

(伊藤訳)

たんじょう日には、皆で楽しく遊ぶことになつていた。教室に飾りつけをして、お招待をするのであつた。おくりものを入れてきた包みは、大さわぎをしてあけられるのであつた。そして、ミンチン先生の私室でちそうがだされることになつてた。

(原文)

The birthday was to be celebrated by great festivities. The schoolroom was to be decorated, and there was to be a party. The boxes containing the presents were to be opened with great ceremony, and there was to be a glittering feast spread in Miss Minchin's sacred room.

原文をみるとわかるように、川端訳では「パーティー」「プレゼント」など英単語をそのままカタカナで訳しているのに対し、伊藤訳では日本語にしている。そのため、川端訳より少し固い印象になっている。このように、川端訳では外来語が多く用いられ、伊藤訳では日本語に訳しなおしていることが多い。

セーラの口調でもそれは同じであつた。一章を見ると、

(川端訳)

あまりへんなので、セーラは、おとうさまのほうへすりよつて、  
「パパ、パパ」と、ささやくように、低い、ふしぎな声で、言  
つた。

(伊藤訳)

あまりへんに思われたので、サアラは父のほうにからだをすり  
よせた。

「お父さま、お父さま」とサアラはまるでささやいているよう  
な、低いふしぎな小声で言った。

(原文)

She found this so puzzling that she moved closer to her  
father.

"Papa," she said in a low, mysterious little voice which was  
almost a whisper, "papa."

川端は地の文では「おとうさん」と訳しているが、セーラの口調  
では、原文の英文に忠実に「パパ」と訳している。それに対して伊  
藤は「お父さま」と日本語に合わせて翻訳している。

伊藤整『小公女』の「あとがき」に次のような文が記されていた。

今までに出了た『小公女』のお話は、みな簡単に短くしたものは  
かりでした。わたくしは一語も残さず全部を翻訳したのです  
が、それは、それは、そういうこまかいところをよく読んでい

ただきたいと思つたからです。

右の文章より、伊藤は日本の人々に再話ではない、本当の『小公  
女』を読んで欲しいと考えていたと言ふことができる。そして、川  
端と比較することで伊藤はあくまでも日本人が読みやすい日本語で  
訳す姿勢を取つていたということができるだろう。

川端の翻訳姿勢を探るため、あとがきを見ることにしたのだが、  
文庫本版も、『世界少年少女文学全集』でも、あとがきは共訳者の野  
上彰氏のものであつた。川端康成の「古い日記」において次のよう  
な日記がある。

昨日、野上氏一家が来て、「あしながおちさん」の印税の話な  
ど。子供たちの写真をくれる。(昭和三十一年一月三十日)

『あしながおじさん』は『小公女』と同じように『世界少年少女  
文学全集』に載せられた野上彰との共訳の作品であるが、昭和三十  
年十二月に初版が発行されたため、翌年一月に印税の話しになつて  
いるのだろう。野上が川端の家にやつて来るという点から、野上は  
川端の師弟関係にあつたのではないかと思われる。また、三章で論  
じる中里恒子のように川端の代作者として野上は翻訳作業を行った  
のではないか、という疑問があるが、代作と異なる点は、野上の名  
前がきちんと表に出ていること、「あとがき」を書くことで野上の方  
が中心となつて翻訳を行つていたと周囲から見てもわかるようにな  
つていたので、代作とは違ふが、川端は細かい添削や指導など行つ  
ていたのではないか、と考えられる。

話は少し逸れてしまったが、川端は野上に大まかな翻訳をまかせ、最終的に文章を書いていたのではないかと思われる。それは、中里恒子にもそのようにしていたことから、野上も同じような立場だったのではないかと思われるからである。

つまり、外来語を最終的に採用したのは川端であり、川端は外来語を用いることで、より海外小説の雰囲気をも的確に表現し、また、セーラの様子を外国のお嬢様風に思わせるしかけをしていたのだろう。

そして、次の文章に注目して欲しい。これは八章の、セーラが一文無しの孤児となった後、今までと違って貧しくみじめな生活を強いられている時の文章である。

(川端訳)

「兵隊さんは、不平なんか言いはしないわ」と、いつでもセーラは小さな歯をくいしばって、「わたしだって言わないつもりよ。いまは戦争しているつもりなんですよ。」

だが、三人の友だちがいなかったら、セーラは、さびしさのあまり、胸がはりさけてしまったかもしれない。

(伊藤訳)

「兵隊さんはぐちなんか言いやしないわ」とサアラは小さな歯を食いしばって言った。「わたしだって言いやしない。わたしはいま戦争のつもりでいるんだから。」

でも、ただ三人の友をのぞくほか、やさしくしてくれる人がいないので、サアラの心はさびしさに耐えられなくなることが

よくあった。

傍線部に注目すると、セーラ像がよく見えるだろう。川端のセーラは「くわ」「くよ」「くもの」と、貧乏になってもお上品な言葉遣いのみである。しかし、伊藤訳では「言いやしないわ」と「わ」を使って一見上品にしているが、「言いやしない」という言葉は語気が荒く感じられ、その後が続く言葉も意地っ張りなプライドの高さを感じられる。そのため、川端のセーラは伊藤のセーラよりお嬢様風でかつ上品なかわいらしさのある少女と結論付けることができる。また、傍線部を見ると、川端訳の方は、「三人の友だち」がいることが喜ばしいように思われるが、伊藤訳の方は「三人の友」では物足りない、と言ったニュアンスが伝わってくる。原文では次のようになっている。

But there were hours when her child heart might almost have broken with loneliness but for three people. (しかし、三人の人々がいなかったら、彼女の子どもの心は孤独で壊れてしまったらどうかあった。)

つまり、伊藤の「やさしくしてくれる人がいないので」は意識となる。そして、その文によつてニュアンスがかわってくるというところから、意思が強く、高慢なセーラ像を作ろうとしていたのだろう。次に川端の作品と『小公女』を比較することで川端の『小公女』に対する思いを見ていく。

『学校の花』は昭和八年九月〜十二月まで「少女倶楽部」に連載



された川端の少女小説である。素直で無邪気な主人公千花子が夏休みみに小学校の後輩、行雄が知ったかわいそうな芝居小屋の「鳩使いの少女」、小夜子が実は女学校の先輩、清水さんの生き別れの妹だった、という話である。この四人の登場人物たちはそれぞれ『小公女』と繋がる部分があると考えられた。

まずは主人公の千花子であるが、千花子はユーモアのある少女である。セーラはお話上手な少女であった。清水さんがお地藏さまにかけると暑がるわ。みんな赤い木綿で作るんですもの、毛糸の涎掛をかけたら、西洋のお地藏さまみたいぢやないの？」(『川端康成全集十九卷』六一五頁七行)と言つて清水さんを笑わせている。

次に行雄である。行雄は貧しい者を救おうとする慈悲深い心を持っている。「だつて、とても可哀相な子役があるんだよ。その子はね、鳩使いの少女なんだよ。僕その子を助け出してやるんだよ。」(一五六頁十二行)行雄のこの慈悲は小夜子への愛情からくるものと言うこともできるが、「可哀相な少女」を「助け出し」たいと考えるこの心はセーラの慈悲深さと繋がるだろう。セーラもまた慈悲深い少女で、学校でミンチン先生にこき使われて食べ物もろくにももらえなかった時に、拾つたお金で買ったぶどうパンを自分もお腹が空いているにも関わらず、「この子は、わたしよりも、もっとひもじいんだわ。うえているんだわ」(川端訳『小公女』十三章)と自分をなぐさめ乞食の子供にパンを与えていた。

そして清水さんは、理由はセーラと異なるが、学校をやめ、働く子供となった。そして、セーラは学校の小さい子供たちの、清水さんは弟の健一の先生となっている。

最後に小夜子である。小夜子は父母がなく、芝居小屋の子役として、周囲にいじめられながら辛く暮らしている少女である。この姿はクルー大尉を亡くしてからのセーラと重なるのではないだろうか。このように登場人物ひとりひとりにセーラと重なる部分がある。『学校の花』は昭和初期の作品で、川端の『小公女』の翻訳は昭和二〇年代後半と、『学校の花』の方が早い時期に書いているため、セーラを意識して書いたと断定することはできないが、セーラにつながる人物像を少年少女に思い描いていたと言つことができる。また、物語の終わりには清水さんの台詞の中に、「あどけない、美しい心は、どんなことでも出来るのねえ。」(二二四頁七行)という言葉があり、これはまさに、川端が少女に思う言葉であり、そしてセーラにも思つたことなのではないだろうか。

『小公女』の翻訳は川端が少女小説を書いていた時期とは異なつてくる。しかし、『小公女』は翻訳がさかんにされてきた小説であり、川端と交流のある菊池寛や伊藤整なども翻訳を行つていたことから、自身が翻訳を行う前にも読んでいたと推測することができる。はっきりと断定することはできないにしろ、川端の作品の中に早くからセーラのような明るく、前向きな、慈悲深い少年少女像が表われていたという事実は、川端の理想の少女像を探る上で大きな進歩と言つことができる。

### 三 「発掘人」としての川端康成

川端康成の作品には代表作が多く含まれていることは既に先行研究などでも明らかにされているが、その中でも少女小説の代表作

として有名なのは、『乙女の港』『花日記』である。これらの作品はどちらも「少女の友」で連載された里恒子による代作である。

中里恒子は、一九〇九（明治四十二）年、神奈川県出身の小説家であり、厳しい家庭に育った中里は家族に隠れながら執筆活動を続け「文学界」などに短編を掲載した。その不遇な執筆状況の中で横光を通して川端康成らと知遇を得る。昭和十四年二月『乗合馬車』で女性初の芥川賞受賞を果たした経歴を持つ女性である。

中里が川端と知り合ったのは昭和九、十年頃であると本人が述べている。

私が初めて川端氏にお眼にかかったのは、昭和九年が、十年か、さだかではないが、それから亡くなるまでの月日を数へてみると、三十六、七年にもなり、半生にわたるといふのも大仰だが、あたたかいおつきあひを頂いた。

文学上でも、未熟な私の仕事を、最初にみとめて下さったのも、横光氏とともに、川端氏であり、過ぎてしまへば月日は夢のやうだと言ふが、私は夢だとは思はない。みんな本当であつたと思ふ。それ故に、川端氏の死には、言ひやうのない非愁を覚える。

これは、昭和四十七年六月「新潮」の「川端康成追悼特集」、「川端康成の死に思うこと」において「生涯一片の山水」と題された中里による回想文である。中里自身が述べたものであるためほぼ間違いはないと思われるが、「中里恒子展」略年譜<sup>八</sup>によると昭和九年に「横光の紹介で川端康成と知る」とあるため、恐らく九年が有力で

ある。

また、実際に川端と中里が交流している様子は書簡から伺うことが出来る。『川端康成全集 補巻二』（新潮社、一九八四年五月）によれば一九三六（昭和十一）年十一月七日、中里から九川端へ宛てられた手紙から、一九四五（昭和二十）年十二月十六日川端から中里宛の手紙が残っている。この中から原稿に関する書簡のみ抜き出してみると、川端から中里宛の手紙が十通、中里から川端へ宛てた手紙が五通であった。これらの書簡からは『乙女の港』について川端が指示する様子や、その他中里の原稿をみて指導している師弟関係のような様子が伺える。

『乙女の港』が中里の代作であるという事実は、一九八九（平成元）年五月十九日付「朝日新聞」夕刊十七面の記事から明らかにされている。この記事内でも指摘されているように書簡から代作を裏付ける言葉を見ることができる。

④「乙女の港お言葉通り注意いたしませう。どんな風に書いても、うまくなほして下さる。こんなわがままな考へが私にあるからかもしれません。」  
(昭和十二年九月十八日付 中里から川端宛)

とあり、『乙女の港』を中里が代作していたことは明らかであると言える。

⑨ けふ少女之友買ひ、花日記にかかります。これは自分で

書いてみてたのしみです。勿論虚構の人物ですけどその人物に私の思つてゐることをみんなさせてゐるせいかもしれません(昭和十三年九月十七日付 中里から川端宛・追伸より)

右のように、中里は『乙女の港』だけでなく『花日記』も『乙女の港』と同じように代作していたことが分かる。冒頭部で「代作はゴーストライターという役割よりは、師弟関係に近いと言ふことができる」と述べたが、これらの書簡の中にその師弟関係はあらわれてゐる。先ほど引用した通番④の書簡波線部からは、中里の川端に対する全幅の信頼が読み取ることが出来る。それだけでなく、中里は川端に原稿を見せることを頼りとしていたようである。書簡の⑨、⑩では中里が川端に自分の原稿を読むように依頼してゐる。また、川端も『乙女の港』はじめ中里の原稿を読み、アドバイスなどをしてゐたことが分かる。ここから、代作がただのゴーストライターではないことが言えるだろう。

川端が中里に代作をさせていた理由は、無名作家に作品発表の機会を与えることが大きかつたのだと思われる。なぜならば、「本にすること」「売れること」に重きを置いてゐる。

⑥ 三月までとすれば、アト四回ですが、なるべく十一月中に全部お書き下さいませんか。本になれば、売れるかと思ひますゆゑ、それもお楽しみとして、よろしく願ひます。

(昭和十二年十月十六日付 川端から中里宛)

⑮ 一昨日文庫にてまりあんぬ物語拝受、(略)大変結構に存じま

した(略)まりあんぬ物語を終曲として乗合馬車などの一聯の御作と合せ鎌倉文庫で出版させていただきたいものと存じます(昭和二十年十二月十六日付 川端から中里宛)

こうして川端は中里を励まし、作家として身を立たせるための指導を、代作を通して行つて来たと言へるだろう。

### おわりに

本論文では、川端康成の少女小説を概観することを目的とし、伊藤整との『小公女』の翻訳比較を主軸として、少女小説における川端の代作問題についてアプローチを行つた。川端と少女小説界のつながりを『小公女』を中心に多角的な視点から見ても来たが、川端は少女小説界の発展を願つて信念を持ちながら少女小説に対する、創作・翻訳活動に力を注いできたと言ふことができる。中里恒子の代作が「朝日新聞」や書簡により明らかになつてから、川端の代作疑惑についてはしばしば問題視されてゐることであるが、もう一度川端康成が少女小説界に果たした功績を改めて問い直すべきだろう。

一菅聡子編『少女小説ワンダーランド』(明治書院、二〇〇八年七月)

二『日本近代文学大事典』(講談社、一九七七年十一月)

三脚注五に同じ

四中嶋展子「川端康成の少女小説——『少女倶楽部』掲載作品の素材を中心に——」(『岡大国文論稿』三十七、二〇〇九年三月) 五筆者による。

六以下『学校の花』の引用は全て全集十九卷による

七川勝麻里「川端康成『コスモスの友』は中里恒子代作か——川端『純粹の声』の感想文草稿を手掛かりに——」（『明海大学教養論文集』二十号、二〇〇九年十二月）に詳しい

八『中里恒子展』（神奈川県近代文学館、神奈川県文学振興会、一九八九年）

九差出人名は「中里」ではなく旧姓の「佐藤」になっている。

一〇日付が飛んでいたり、往復形式になっていないのは恐らく紛失などの理由から現在では書簡を確認できないものと思われる。

一一丸囲み数字は資料編表四の通し番号による